

# オリヴ・シュライナー『アフリカ農場物語』： 進歩，女性，帝国論

—カール台地に吹く赤い風—

上野和子

Olive Schreiner's *The Story of an African Farm*: Progress, Woman, and Empire  
—The Red Wind Blowing from Karroo—

Kazuko UENO

## Abstract

Olive Schreiner was the first 'modern' colonial writer from South Africa, and one of the most brilliant feminist writers in late-Victorian Britain. Born in 1855 to missionary parents in colonial South Africa, she passionately refused both Empire and God, as well as the gender roles of Victorian society. Her narrative, *The Story of an African Farm*, struck well with the hearts of the intellectuals who had concerns about the great changes unfolding from the growing capitalistic society.

This paper principally endeavors to analyze how Waldo's tale in *The Story of an African Farm* expresses the traumatic discovery that there is no God on the African Farm and how Lyndall's tale elaborates the New Woman dispute in the current allegory of oppressed womankind. Though represented in a farcical, rather sad and grim way, Waldo's father Otto, Boer woman Tant' Sannie, and the fraud Bonaparte Blenkins together illuminate the bleak image of fatherlessness of the farm and colony, the failure of patriarchy itself, and the decaying evangelical theology. Bonaparte symbolizes the oppressor of the colony and also the capriciously cruel Will under Schreiner's social Darwinism. In London, Schreiner joined The Men and Women's Club founded by Carl Pearson and expanded her concept of women's sexuality and labor. Throughout her life she sought to vindicate the oppressed free of any differences in class, race, and sex.

## 1. 進歩，女性，そしてシュライナー

オリヴ・シュライナー (Olive Schreiner, 1855-1920) の人生は、ダーウィンの『種の起源』(*The Origin of Species*, 1859) が新しい時代を拓いた時期と重なっていた。ダーウィンの自然選択<sup>1</sup> (natural selection) と名づけた生物の進化の理論は、化石の発見や比較解剖学など科学知識の進展で、既にダーウィンの父で医師のエラスムス・ダーウィンや「用不用説」を説いたラマルクなど科学者たちの間で浸透していた。また、ダーウィンが、マルサスの人口論にヒントを得たことや、ハーバート・スペンサー (Herbert Spencer, 1820-1903) の造語「最適者生存」(survival of the fittest) の概念を借用したことは周知のことである。これらのことを考え合わせると、産業資本主義の発達期にある当時のイギリス社会全体が、自由競争による発展という理念に関心を寄せていたことが分かる。したがって

『種の起源』の出版は、「形而上学的あるいは神学的な知識というより科学的な事件であった<sup>2)</sup>」のだが、実際には宗教と科学の衝突や、社会の変遷や形態などの論争に拍車をかけたのであった。ヴィクトリア朝の知識人の多くは、科学技術の躍進、植民地の拡大や産業革命による大規模な社会変化を目の当たりにして、進化論を明るい未来への進歩という、社会形成の論理に結びつけた。しかし、進化論における闘争、過剰、衰退や絶滅という言葉もまた、文明の衰退という悪夢を描きたてたので、必ずしも人々は、楽天的にヴィクトリア朝社会が正しい方向に向かっていると信じたわけではなかった。

1870年および80年代、哲学者ハーバート・スペンサーの社会進化論は、無神論と有神論、あるいは科学と宗教の対立を解くために、双方とも共通の仮定条件の上に成立していると論じて人々の共感を得た。彼は、『第一原理』(*First Principles*, 1862)、後の『総合哲学体系』(*A System of Synthetic Philosophy*, 1862-93)において、科学も宗教も完全には現実を明らかにできないと述べた。スペンサーは「知ることができないもの」(*The Unknowable*)、「知ることが出来るもの」(*The Knowable*)を論じ、不可知論を主張した。彼は物理学からエネルギー保存、万物不滅、ベクトルの法則などを援用し、進化の過程が決して永遠ではなく、平衡状態と呼ぶものに向かい、人間の存在条件も含めて、この宇宙的な平衡状態が各部分の調和を予兆していると結んだ。彼の唱えたソーシャル・ダーウィニズムにおいては、未開から文明へと変化する社会は、宇宙全体における単純から複雑への変化の一例にすぎない。けれどもその複雑さ、多様性の極致こそが人類社会の到達点であり、目指すべき理想社会であった。従って当時の啓蒙主義的な気風のなかで、スペンサーの唱えた理想の国家像は自由主義国家であるという考えが、広く受け容れられたのだった。

現実の生活が満たされないからこそ、進歩の思想に飛びついた人々もいた。19世紀の後半には、労働者階級や中産階級の男性が社会の進展を速める航路で舵を取りたいと主張し始めた。女性たちも進化論に希望を託し、女性解放の機軸となる理念を見出だそうとした。しかし性差を絶対視する当時の生物科学は、女性解放に敵対する最も危険な思想のひとつであった。ダーウィンやスペンサー、それにイギリスの先駆的精神科医ヘンリー・モズレイ(Henry Maudsley, 1835-1918)や性心理学者ハヴロック・エリス(Havelock Ellis, 1859-1939)など進化論者の言説には、女性の平等思想に反対する議論が認められた。それ故、19世紀末の女性運動家たちの姿勢は、メアリー・ウルストンクラフト(Mary Wollstonecraft, 1759-1797)が『女性の権利の擁護』(*A Vindication of the Rights of Woman*, 1792)で描いた合理主義的女性観とはほど遠く、近代性そのものが女性の行く手を阻むように見えたのであった。

近代人の自我や経済構造について探求した思想家によっても、女性性という概念は、進歩に対して曖昧な関わりを保っている。ダーウィン<sup>3)</sup>同様、マルクスやフロイトもまた、経済の動きや精神の働きについてその起源を推定したが、どちらも文明の創造過程において、女性は抑圧されるという苦しい特権を与えられた。エンゲルス(Friedrich Engels, 1820-1895)は『家族・私有財産・国家の起源』(*The Origin of the Family, Private Property and the State*, 原著1884)において、私有財産制が女性の従属をもたらし、一夫一婦制の結婚による父権制度への移行を実現させたと述べた。エンゲルスによれば、一夫一婦制の実現こそ文明の始まりであって、私有財産の蓄積が資本主義社会を形成し、これを支える結婚の形態がブルジョア家族であった。一夫一婦制社会は大いなる歴史的前進であったかもしれないが、それは女性の悲惨と欲求不満を犠牲にして男性に多くの利益をもたらしたのであった<sup>4)</sup>。

1920年代の終わりに、フロイトは「文明への不満<sup>5)</sup>」(*'Civilization and its Discontents'*)のなかで、

再び女性に自滅的な役割を負わせた。フロイトによれば、文明は人間の偏向、代用、内面化、抑圧、脱線という可能性の集大成である。人間の本能が、社会的経済的文化的な努力によって、方向修正させることによってのみ、社会は良い方向に進む。それは人間の活動が欲動の昇華 (sublimation) という段階に至り、学問的、芸術的、イデオロギー的活動などの高次元の心理活動が、文化生活のなかで重要な役割を果たす際に起こる。文明の両親は、エロスとアナanke、つまり愛と必要性である。女性に象徴される愛が文明の基礎である。潜在的に破壊的な力を持つ男性を、共同体に結びつける女性の要求が、愛と家族である。だが自我を守るために、人々は愛を個別の対象から共同体に向けなければならない。フロイトによれば、そういう文明の進化に抵抗するのは、初めに文明の礎を築いた女性であるとしている。

19世紀末、イギリスの女性解放論争において、女性の特異性である愛、結婚、母性は政府の庇護の下に実現されるべきであるということが真剣に議論される一方、それらは女性の自由や自己実現を果たす上で大きな障壁であると考える者もいた。多くは、男女双方に資する新しい愛や異性愛の関係が実現することを望んだ。さらにシュライナーのように、女性の愛は、進歩促進のために必要不可欠な条件であると主張する者もでた。

当時の進化論で明白であるとされた男女の性差は、それが社会生活に応用される際、実際には定まらず論争が続いた。だが、20世紀の第二波フェミニズムは、医学の発展により二元論的性差論に疑問を呈し、より多元的多文化的な人間関係を志向し始めた。フロイトの精神分析学に深く関与したジュリア・クリスティヴァ (Julia Kristeva, 1941-) は、第二波フェミニズム以降に現れた新世代を分析し、それ以前の女性参政権運動家や実存主義フェミニストの活動とは異なり、「彼女たち (新世代) は女性心理の特異性やその象徴的な認識に興味をもち、過去の文化で沈黙させられていた (女性) 内在する主体や肉体的な経験を言葉にすることを探求している<sup>6</sup>」と述べた。(括弧は筆者による加筆)

一般にフェミニズムの基本姿勢は、ヨーロッパの啓蒙運動で形成された人間開放という近代事業に参入することであった。従ってフェミニズムは、近代社会が人権を保護する基準や目標を設定する際、修正し変更させてきた。だが、20世紀の初期には、主として欧米各地で、女性が民主的な権利を賦与された結果、多くの女性が政治に参加するにつれて、彼らは「個人的なことは政治的なことである<sup>7</sup>」という政治認識を持つようになった。

オリヴ・シュライナーは、当時の科学知識や社会進化論などを独学で習得し、急進的<sup>ラディカル</sup>に行動した輝かしいフェミニストのひとりであった。本論ではシュライナーが作家として出発し、当時の女性論や帝国主義論争で活躍するにいたった経緯を、主として小説『アフリカ農場物語』 (*The Story of an African Farm*, 1883) を中心に検討する。ケープ植民地に生まれたシュライナーは、キリスト教や帝国主義、ヴィクトリア朝の女性観に反抗し、「新しい女」として激しく闘った。

シュライナーは、世紀末の「女性論争」に関わる最も重要な人間であった。おそらくそれは、彼女が植民地に育った体験から、西欧中産階級の女性による解放の要求と、帝国主義が植民地下の人々に与えた衝撃の関係を熟知していたからであろう。女性としての限界はありながら、時代のはるか先を洞察するシュライナーの見識が、イギリス社会にもたらした影響は大きかった。彼女の生きた時代は、南アフリカの金鉱発見、後期ヴィクトリア朝の産業危機と植民地統治の崩壊、世紀末の社会主義や女性参政権の運動、そして第一次世界大戦の勃発まで及んでいる。シュライナーは15歳の時、ダイヤモンド山の開発で騒然とするニュー・ラッシュ (New Rush; 今日のキンバレー) で創作を始めた。

その後、ロンドンに渡り 26 歳で小説『アフリカ農場物語』を出版するや、初めての植民地作家として賞賛を浴びた。

シュライナーの作品は、物質的にも精神的にも荒涼とした故郷南<sup>ふるさと</sup>アフリカの地を舞台としているのだが、その精神的基盤は純然たるイギリス文化に根ざしており、そのテーマはイギリス産業主義の問題と不可分であった。彼女は進化論など新思想を求めて、新しい社会を希求した。だが、帝国の植民地政策が、実は暴政をもたらす現実を、次第にはっきりと理解した近代人でもあった。特に 1889 年、南アフリカに帰国した彼女は、セシル・ローズのマジョナランド殺戮などその統治政策を強く非難した。シュライナーの作品や人生は、植民地の統治者と統治下の人間の意味を徹底的に探求することで、帝国主義の矛盾を暴露し、今日我々が人種やジェンダー、権力と反抗の闘いを検討する貴重な資料となったのだ。それは彼女が断固として社会の進展を理想化し、新しい男女関係を望んだ進歩主義作家であったからである。

## 2. ケープ植民地に生まれる

彼女の生まれた、今日の東ケープ州にある開拓地ウィッテベルゲン (Wittebergen) は、激しい雷が頻繁に起こり、カルー台地 (Karoo) の赤土の風が吹きすさび、地獄の炎のような太陽が照りつける草原の群落であった。近隣には、アマ・フィンゴウ家と、生き残りの少数のコイコイ (ホッテントット) 族が住むだけで、最寄りの郵便局は 100 マイルも離れていた。父親ゴッドローブ (Gottlob Schreiner, 1814-1876) は、ウェズリー派布教センター主任であって、ドイツの靴職人の息子として生まれ、バーゼル伝道教会付属神学校で学び、その後ロンドン伝道協会 (Islington College of the Church Missionary Society) から派遣されたのであった。母親レベッカ (Rebecca Lyndall, 1819-1876) は、ヨークシャーの組合教会派牧師の娘としてフランス語やイタリア語を学び、歌と絵画を愛し、新思想にも触れていた娘であった。結婚後 3 週間で二人は、南アフリカへ旅立った。

シュライナー家の南アフリカへの旅の背景には、2 世紀にわたる南アフリカの植民地化の歴史がある。1806 年に英国人がケープタウンを占領した時、植民者の多くはオランダ人であった。そこで政府は 1820 年代に英国人を大量に呼び寄せ、辺境の英国人農場の活性化に努めた。グレート・トレック (Great Trek) の 1837 年<sup>8</sup>、シュライナー夫妻は、ライダー・ハガードのいわゆる「帝国の余剰人口」である、失業者、聖職者や没落ジェントリーの二男三男、その非嫡出子などの間で暮らすこととなった。夫妻には 11 人の子供が出来たが、大家族で辺境の熱い草地を任地から任地へ移動する 20 年間であった。父親は信仰の篤い男であったが実生活は無能であって、ウェズレイ派教会の商売禁止という厳則にふれ牧師職を解雇された。その後彼は破産し一家は離散した。シュライナーは、一時教師をしていた兄テオフィリスの所に身を寄せたが、16 歳で独立し家庭教師を始めた。

シュライナーは、母親との確執、現地の使用人 (ボーア人、ホッテントットやカフィール人) に囲まれた白人家族の暮らし、妹エリーの死と向き合って成長した。暮らしは楽ではなく、母親は教会の厳しい教えを頼って生活せざるをえなかった。従って彼女は支配階級の楽しみであるクリケットや日暮れ時のお酒 (sundowner) の代わりに、アフリカ人やボーア人をあからさまに差別し、清教徒的な性道徳を守り、禁欲的な食事を家族に強いた上に、子供たちに対してはキリスト教的見地から罪の咎めに熱中した。シュライナーに言わせると「誤って居間におかれたグラランドピアノ」のような母親は、復讐の天使に変身し、子供たちを些細な罪でも虐待した。シュライナーは 5 歳のとき、禁じられたオラ

ンダ語を使った罪で50回の鞭打ちを受けた。オランダ語は使用人であるボーア人の言葉で、英語こそ主人であるイギリス人の使うべき言葉であった。その上、彼女が9歳の時、可愛がっていた妹エリーが1歳半で亡くなった。これが教会に背を向けて、自由思想家になった動機と言われる。そのため、彼女は常に、追放者、棄民という意識を拭い去ることができなかった。彼女は、孤独との闘いのなかで、文学や歴史に没頭した。20歳になる前に、ダーウィン、スペンサー、J.S.ミル、シェイクスピア、エマソン、ラスキン、モンテーニュ、ゲーテ、カーライル、ロック、その他カール・ボグの『人間学講義』(Lectures on Man, 1865)、H.T.バックル『英国文明史』(History of Civilization in England, 1925)を読んだと述べている<sup>9</sup>。

母親とキリスト教への反抗という形でシュライナーの自己形成がなされ、家庭は聖なる避難所ではなく殉教と裏切りの場となった。彼女の性格は、ジェンダー役割への反抗と罪意識、自立と罰というひねくれた論理で形成された。作品上の戸口や窓辺、海岸や死の床、昼と夜などが、家庭と荒野、愛と自主性、従順とスキャンダルの間を分かち、家庭崇拜に対する境界線のイメージを示している。『アフリカ農場物語』のなかで、部屋に閉じ込められた少女リングダルが窓枠を壊しシャッターを開けようとする場面は、女性の壁を表現している。世間を隔てる窓ガラスは、ブロンテ姉妹の作品に描かれたように、女性の損傷、挫折感、裏切りの象徴である。

しかし、シュライナーのアウトサイダーという感覚は、外国の地へ侵入した植民地の人間に共通した疎外感である。白人の植民者としてアフリカ人からも家族からも、宗教からも切り離されたとはいえ、彼女はすべての慰めを捨てることは出来ず、アフリカの自然に失われた宗教の影を見出した。幼い頃から、彼女は「気まぐれで盲目の宇宙」<sup>10</sup>と普遍的な「真理」があるという不可知論的世界観を持っていた。聖書や祈祷書を捨てた彼女は、R.W.エマソン(Ralf Waldo Emerson, 1803-1882)に影響されたこともあって、椰子やアフリカ羊歯、大アリなどが神の代理人となった。もし聖書に記された男性の神が失われたとしたら、女性性を持つ自然が今やその代わりに話しているのだ。カルー台地の圧倒的な美しさはまるで「石が本当に話しているように見えるんだよ…<sup>11</sup>」という宇宙観を彼女に与えた。

### 3. 『アフリカ農場物語』

#### (1) 祭壇にラムチョップを献じるウォルドー

この作品では、家父長制家族の崩壊、キリスト教への懐疑、そして結婚制度批判というテーマが、不毛なアフリカの、カルー台地を舞台に展開する。特に「物言わぬ神を求めて、異郷の大地に叫ぶ孤独な少年」ウォルドーの姿は、当時の読者の琴線にふれたに違いない。教会権威の失墜という広い文化的な感覚と共鳴し、信仰の喪失という体験は、深刻な社会不安を醸成していた。

物語は、少年ウォルドーと少女リングダルの二つのパートに分かれている。ウォルドーの物語は、神の不在という発見に驚愕する少年の体験を、リングダルの物語は、抑圧された女性性を描いている。作品の舞台は、非文明的なケープ植民地の農場であり、その家族は病理的な惨状を呈している。白人の農場主は亡くなり、白人農場主の娘で孤児のエムを託された前近代的なボーア人の女性、タント・サニー、そして羊飼いのウォルドー父子、孤児リングダルの単調な日常生活が描かれる。農場を訪れる様々な人間が、物語の危機や行動や啓示を促す。一番目の訪問者ボナパルト・ブレンキンズは、キリスト教の敬虔、商売人、植民地に暗躍する投機屋のパロディである。ウォルドーの信仰の喪失を早めたの

は、彼の回りくどい説教だった。

シュライナーの他の作品同様、物語はアフリカの満月がカルー台地を照らす美しい夜から始まる。ここで月は半透明の不確実性という複雑なシンボルである。月は救いを予感させるが、ダチョウ農場に不気味な光を投げかけている。第一章「子供時代の影」のサブタイトル「見張り」(The Watch)は、ウォルドーの「徹夜」という2重の意味を持つ。彼は荷馬車小屋の離れで、父親の銀時計が時を刻む音を聞きながら、孤独な怒りに苛まれ眠れない。夕べに父親が読んだ「マタイによる福音書」を思い出す。「滅びに通じる道は広く、破滅に至る」と(37)。少年には一秒ごとに、もう一つの魂が地獄に落ちるように聞こえる。「多くの黒い群集が」「世界の暗い淵に消えていく」のを想像し、「神は人々を助けない」という確信に恐怖を抱く。永劫の苦悶という「遠い、遠い過去」と「遠い、遠い未来」を考える時、彼は寄る辺のない絶望感に泣くのである(37-8)。彼にとって時計は、永遠と死を示すシンボルで、ヴィクトリア朝産業社会の進展を表象すると同時に、その機械的で冷酷な動きで、現世と、死の時刻を告げるグロテスクな呪物でもある。もし、産業社会が時計時間を称揚するならば、シュライナーにとって宣教師の鐘は死を意味し、自らの創造物の運命に対して冷酷な神の倫理性を問う隠喩となる。

ウォルドーは、小石で作った神の祭壇に自分の昼食であるラムの肉を献じるが、聖書で語られる神の大火災も起こらず、ただ「真昼の陽光は垂直に照りつけ、地面は眼前に震えていた」(39)。黙して語らぬ神の証しを求めて自分の存在を問うウォルドーは、自然の中で孤独に立ち尽くす白人の象徴でもあり、植民地ナラティブの典型となる。彼の精神的な危機は、ヴィクトリア朝の普遍的な魂の危機を描きながら、同時に植民地存在の妥当性を問い直している。

ウォルドーの結論は、「僕はキリストを愛しているが神は嫌いだ」(42)の独白に表される。彼は、マシュー・アーノルドの近代人の解放<sup>12</sup>、つまり世界観を把握する知的な解放を求めていた。作品の第一場は、無垢で無知な子供が、厳罰を課す教会の厳則に慄くヴィクトリア朝文学の色彩を受け継いでいる。アフリカ農場に神は存在しないという衝撃的な発見こそ、彼の成長する領域である。それは、ヴィクトリア朝ブルジョア文化が、近代精神に接近する際通り抜けなければならなかった領域であり、アーノルドが「膨大な量の事実」を理解したいと考えた意味での近代精神である。

## (2) 赤鼻ボナパルト・ブレンキンズ

ウォルドーの物語は、ヴィクトリア朝の伝統的な〈孤児の物語〉であり、ユーモアと皮肉が際立っている。福音主義教会の教えと、「神」のことしか頭がない少々狂信的な趣はあるが、生真面目で融通の利かないウォルドー父子に対して、「金」のことしか頭がない俗っぽいボナパルトとタント・サニー、いずれも戯画的で植民地の周縁的な人物に描かれている。特に、ボナパルト・ブレンキンズは、赤鼻の大食漢、おしゃべり、大嘘つき、女好き、演技過剰だが冷酷残忍な詐欺師で、この後シュライナーはこれ程素晴らしいディッケンズ的な人物を描いていない。勿論彼の名前はナポレオン・ボナパルトのパロディで、モンスマン<sup>13</sup>の指摘によれば、Blenkins という苗字は、欺くという意味の古語 blenk に由来するとしている。彼は自分の企てが首尾よくいくと、ウィンクをする。blenk は blink や blench と意味上は繋がり、blench という言葉には、「だます、ごまかす、そして抜け目なくやる」という意味もある。

リンダルは、「物語だけに素敵な最後があるのよ。実際は、(ナポレオンの末路のように)悲しいもの

だわ」(48)とボナパルトの本質を指摘する。彼女の聡明さは読者に期待を抱かせるが、まもなく不吉な影を帯びる。ボナパルトの畏で、ウォルドーの父親オッターが亡くなるからである。お人よしの彼は生前、タント・サニーの反対にも拘わらず、ボナパルトを自分の小屋に泊め、彼に服を与えた上に、日曜のミサの説教を彼にさせ、タント・サニーとの間を取りなした。だが、ボナパルトはその地位を利用し、オッターに窃盗の罪をきせた挙句、農場から追い出すことに成功する。運命を諦めたオッターは、農場を出る準備をするが、翌朝心臓発作で亡くなる。しかしオッターは物語を愛し、ロマンスや冒険物語は真実と信じて理解する。ボナパルトを受け入れる彼の態度は、ある意味で福音教会の教えの一部であり、それが彼の愚かさに拍車を駆ける。ボナパルトの母方がナポレオンの血筋を引くアイルランド系で、父方はウェリントン公爵の末裔であるという奇妙な話を真に受ける彼に、リンダルは尋ねる「オッター伯父さん、どうしてその話を本当にするの？」オッターはボナパルトの虚言癖をまったく理解しない。「それはそう言われているからさ。もし我々がすべてを疑い始めたら、証拠、証拠、証拠。信じるべき何が残っているのかね？」(62)

オッターは善意の人間として描かれ、彼はリンダルとエムにとっては二人が知っている唯一の家庭的拠り所であった。しかし、彼の信仰や愚行が、子供たちを極度に弱い立場に陥れ、無防備な息子をボナパルトの残虐な行為の餌食にしてしまう。ボナパルトは少年を折檻する理由を探し、タント・サニーの虫食い桃を食べたとして少年を鞭で打つ。この凄惨なエピソードは、植民地体制下の人間の残虐性と無防備性を暴露している。だが、ここでシュライナーは決して筆を休めない。ボナパルトとウォルドーの、抑圧する者と抑圧される者の間の根源的な対決を書き込んでいる。

「君の父親としてすることだ、ウォルドー。そうだな、背中を裸にした方がいい」。…「これからお前にすることを主が祝福し、浄めますように」最初の一打ちは、肩から背中の中あたりに走った。二番目も正確に同じあたりに入った。少年の身体に震えが走った。…鞭打ちを終えると、彼はもう一度鞭(についた血)を拭いて後ろのポケットにしまった。(少年の腕を縛っていた)縄をナイフで切り、蠟燭を手を取った。「まだ舌が回らないようだね。泣き方も忘れちゃったのかい」…

少年は、不機嫌や怒りの表情を示さず、彼を見上げた。その眼には、野生の、襲いかかるような恐怖が浮かんでいた。ボナパルトは急いで外に出て戸を閉め、ウォルドーを独り暗闇に置き去りにする。彼自身、あの目つきが怖かったのだ。(124-125) (括弧は筆者の加筆)

オッターもボナパルトも共に、農場における不適切な父親像を体現している。ボナパルトは、ウォルドーにとって刑罰を課す教会同様、欺瞞と暴政を増幅させる父親像のパロディである。子供たちは、現実的にも精神的にも孤児の象徴であり、父親不在がアフリカ農場における帝国主義の失策と神の喪失を表象している。ボナパルトに惚れられ求婚されると思っていたタント・サニーは、彼が自分の姪に言い寄るのを見つけ、逃げ出す彼の頭に漬け物の水を浴びせ、彼の尻にマトンの肉をぶつける。「それ以後ふたたび、彼の足音は古い農場で聞かれなくなった」。(133)

ところで、パートIでは、ウォルドーの犬のドスが、主人の世話がなくなったので、「黒カブトムシを見つけに行った。カブトムシはその日の午前中馬糞を集めて、大きな球を一生懸命作っていたのだが、ドスは初めカブトムシの後足を食べ、それからその頭を食いちぎった」(107)。自然はあらゆるものを本能的な生命力で死に駆り立てるのだという冷酷な寓話である。「そしてそれは全くの遊び

でしかなく、それが、何のために生き、動いてきたのか分からない。」(107, 135) 犬がカブトムシを食う場面はオットーの死の直後であるが、ボナパルトがウォルドーの羊の刈り込み機を見つけた時と重なる。それは製作に9ヵ月かかったもので、父親の死後彼の朝の仕事となったものである。刈り込み機の製作は彼の将来の目標であり、報酬が期待できる外界との唯一の繋がりであった。それが近代化を意味する限り、ウォルドーにとって世界は意味のあるものになる。ウォルドーの話に熱心に耳を傾けていたボナパルトは、即座にその器械を足で踏み潰してしまう。(106-7) ドスがカブトムシを食う場面とボナパルトの器械の破壊は同列に語られる。意味も目的も奪われ、自然も人間界も同様に、不条理な力の餌食となるのである。

道を失いさ迷う人間に対峙する「気まぐれで冷酷な自然」という概念は、地理学や生物学の解明などによって、当時人々の心に開いた想像の所産であった。ちっぽけな人間は神の創造物ではなく、地質学的時間という膨大な広がりの中で、はかない存在なのだ。1829年、カーライルは、冷酷で器械的な力をもつ近代産業主義は人間性を剥奪する面を持つと警告を発した<sup>14</sup>。経済競争に支配される資本主義の進展に、ロマン主義者たちは19世紀半ば、闘争と生存の法則という自然界の秩序に直面することとなった。

#### 4. 〈自然はオープンシークレットである〉

ウォルドーは、次に農場に立ち寄った白人と彼から贈られた書物によって救われる。名前も告げぬこのアウトサイダーは宗教を否定し、科学的な世界観の勝利を伝えた。彼は、スペンサーの著書『第一原理』をウォルドーに残したが、それはシュライナー自身の体験に基づいている。彼女が、バスターランド(Basutoland)の親戚の家に滞在している時、嵐の夜訪問者が来た。父親の前任者の息子であったが、しばらく彼女と話し込んで、別れ際にシュライナーに『第一原理』を貸してくれた。数年後、この男は自殺してしまったが、彼女はこの本に「暗いローマの世界に突如現れたキリスト教のような」衝撃を受けたと述べている<sup>15</sup>。完全な無神論の状態にいた彼女は、スペンサーの生物の種の進化に活路を見出したのだ。

シュライナーがスペンサーに学んだのは、進化論の関係性とその含意であった。第II部のタイトルTimes and Seasonsは旧約聖書「伝道の手紙」の万物流転を引用しているが、世界は「偉大なひとりの意志」(The great individual will)によって恣意的に存在する。しかし、自然の調和というロマン主義的概念の啓示でウォルドーは救いを感じる。「自然は、Open Secretである」。化石や、魚の骨、雲の移動などすべてのものが自然界の真理の象徴となる。人間の身体もまた、神の所業の暗示を提供する象形文字であり、書物もウォルドーにとって、社会的疎外や孤独からの避難所であった。彼は、豚小屋を見ている時、その形状にロマンティックな調和に似た何かを直感し、メス豚や子豚、ぬかるみなど全体の和を美しいと感じる。「ひとつをとっても美しくないが、調和して美が生まれるのだった」(111) スペンサーの宇宙的な進化論はすべてを包み込むのだが、そこにシュライナーはエマソンに感じた科学の聖域を見出し、そのロマン主義に共感した。

しかしながら、1880年から1890年代には、スペンサーの個人主義や自由放任主義は保守的なリベラリズムと結びつけられ、大衆の福祉政策を推進するニュー・リベラリズムから反動的だと非難された。社会進化論はスペンサーの自由主義的なものから変質し、適者生存・優勝劣敗という発想から強者の論理となり、帝国主義国家による侵略や植民地化を正当化する論理になったと言われている。シ



ユライナーもまた、ハヴロック・エリスに宛てた手紙にあるようにスペンサーから離れていった<sup>16</sup>。

ウォルドーの物語は、宗教的懐疑から近代科学の展望による解放である。しかし、彼の啓示は何をもたらしたか。彼は、農場の「向こうの素晴らしい世界」に入っていくが、帰ってきて二度と農場を出ようとしなない。外の世界は彼に社会的な抑圧、精神を萎えさせる過酷な肉体労働しか加えない。ウォルドーの手紙では、鞭打たれる牡牛が、またもや生存の無意味さと不正義の象徴として語られる。(257-8) 彼は農場に立ち寄った例の紳士を、植物園で見かける。しかしそこで初めて彼は、社会的な壁を認識する。彼は自分が「タンコード (tancord) を着た惨めな人間なのだ」と悟る。彼が広い世界を夢見た頃に懐れた海も、ただ、彼の渴望状態を wanting, wanting, wanting と示すだけであった。(259-260)

## 5. リンダルの物語—「新しい女」の予感

リンダルは知的で近代的な女性であり、ダイヤモンドの輝きのような明瞭さで、シュライナーが以後十年以上、論議を尽くすフェミニズムを体現する。たとえば、それらは女性の経済的依存、娼婦になるのと同様な結婚制度、労働価値、騎士道精神の欺瞞、母性の重要性、知的で性的な男女の関係などであった。シュライナーは、社会の抑圧が女性を従属的なものとし、そのため従順な性の役割という固定観念が内面化され、そのプロセスの中で女性の隷属状態は自然で必然的であるように見えるのだと主張した。「私たち自身を悪くしているのは、外から加えられたものではなく、私たち自身の中にあるの」(188)。これこそリンダルがシュライナーの同世代や後のフェミニストを魅了した言葉であった。エレヌ・ショーウォルター (Elaine Showalter, 1941-) は、『彼女自身の文学』<sup>17</sup>において、「リンダルこそ、小説上初めての本格的なフェミニストである」と述べたが、リンダルの物語は期待はずれの小説であるとし、彼女の洞察力に見合う物語の結末を出すことに失敗したと断定する。リンダルは結局、南アフリカの批評家ステファン・グレイ<sup>18</sup>の言うとおりに、「どこにも行き着かないボーア人の荷馬車の中で死ぬ」、つまり無駄死にするのだ。だが、西欧ロマンスの影を落とす第一作『アンディーン』(Undine, 1929) と異なり、シュライナーは、リンダルがヴィクトリア朝の「墮落した女」のステレオタイプになることを驚くべき方法でくつがえした。

リンダルの物語も、ウォルドーの物語同様、恐ろしく植民地的である。彼女は、未婚の母である自分と自分の私生児に父親の苗字を与えるため、農場主グレゴリー・ローズとの結婚を目論むが、結局将来のおぼつかない愛人と一緒になる。彼女は文化的な現代性を嫌う。「私は故郷には行かない」(彼女は英語を話すケープ植民地のことを言っているのだ)、「私はヨーロッパには行かないわ」という言葉どおり、北部ボーア共和国を目標として、リンダルは、地理的に「プレ・モダン」の植民地へ移動し、象徴的に近代性から遠ざかる。ウォルドーが農場の外に希望を見出せなかったように、リンダルの問題は西洋文明の中では解決できない。

しかしウォルドーと異なり、リンダルには自然のもたらす恵みはなかった。リンダルは伯父オットーの墓に向かって「私は息ができない、生きていけないわ！」(241) と告白する。彼女は農場を出て女学校へ行くが、そこは決して自由な場所ではなかった。タント・サニーの結婚式では、彼女が嫌っていたボーア人の結婚式が、近代社会では見られなくなった共同体の安定性を示す。リンダルの社会的な上昇志向は強かったが、4年後に戻ってきた彼女は単に「壁に張られた絵の…貴婦人」にすぎない。彼女は、愛人が自分の肉体しか愛さないという理由で結婚を断り、ウォルドーに言う。「私たち

は二人とも考える人間なのよ。男でも女でもないわ。」(210)

しかし、彼女にとって知性も女性美も役立たない。結婚して安定を得るためには、女性の利点を注意深く利用しなければならない。以前は「自分が崇拜できる何かを見つけることによって、自我から解放される(279)」とリンダルは考えた。しかし、最終的に崇高さとは、「他者に対する無限の哀れみである。偉大さというものは、日常のものを受け入れ、その間を誠実に歩くことである。つまり幸福とは偉大な愛と奉仕である。」(280)と結論づける。このようにリンダルは、一方で野心と意志の強さを示しながら、他方では良心や倫理を象徴することとなった。それが、私生児を産む女性を非難するヴィクトリア朝社会の偏った倫理観に対する、シュライナーの反論である(209-10)。

女性解放論は、しばしばブルジョア家族を破壊するという攻撃にさらされた。リンダルはそのような社会に反論する。「女性解放運動家は、この世に正義や平等をもたらす代わりに、愛を否定されると言われる。学問のある女は可愛くないし、愛することもしない…(195)」エマ・ゴールドマン同様、シュライナーの女性解放論には、性的かつ母性的な愛の双方が含まれていた。「他の誰よりも私たちが、愛が買われたり売られたりしない新しい時代を熱望しているのは、まさにその愛のためなのに」とリンダルは言う(195)。

女性性をブルジョア家族が理想化する過程には、本質的に道徳に伴う暴力が発生する。完璧な女性(処女性も含めて)を求めることは、トーマス・ハーディが、『ダーバーヴィル家のテス』(1891)の主人公で示したように、墮天使を描くような結果になる。『アフリカ農場物語』においてシュライナーは、リンダルをこの道徳的な性倫理から解き放った。リンダルは結局、自分の野心を開花させるフェミニズムを実現出来なかったが、だからと言って禁欲的に、偉大な愛と奉仕を实践したわけでもない。シュライナーは後に『男から男へ』(*From Man To Man*, 1926)の主人公レベッカで描いたように、リンダルに多元的な人間関係を追求させた。「私は今の自分とまったく違う生活をしてみたいの。」彼女はウォルドーに言う。「たとえば数珠を付けた中世の僧…遊んでいる小さなマレイの少年とか…ベンガル菩提樹の下で独居するヒンズー教徒の哲人とか…ローマの通りを踊り歩く白衣のバッカスの信徒たちの群れとか…」(214-15)

文化的な差異や関係を認識する際に起こる西洋文明の優越感について、シュライナーは『男から男へ』において、さらに発展させている。『アフリカ農場物語』でシュライナーは、他者を搾取し抑圧する文化的な暴力を認めないという女性を示した。その10年後、イギリスやヨーロッパから南アフリカに帰国した彼女は、「イギリスの女性は、他の国や大陸との関係において〈進歩〉の意味を考慮しなければならない」と主張するようになる。この作品では、愛に奉仕する犠牲的な女主人公の代わりに、それを実践するのは、女性の服をつけた男性なのである。

未熟でナルシズムの強い、ロマンティックな農場主グレゴリー・ローズは、エムの婚約者であったが、美しいリンダルが帰郷した途端、彼女に夢中になってしまう。しかしリンダルは彼を捨てて、全財産の50ポンドをエムに与え、農場を去る。にも拘らず、グレゴリー・ローズこそ、リンダルが死産を経験し、その後亡くなる前に、ヴェルトの峡谷へ行き、リンダルを探し介護したのだ。彼は屋根裏で母親の持ち物を見つけた時、髻を剃って母の赤い服をまとった。彼は女性として生まれ変わったのだ。だが、以前の身元を洗い流すことによって、彼の名前はもうひとつの象徴的な意味を持つにいたる。女性的な「薔薇」という苗字を離れて、グレゴリーもまた、4世紀カッパドキアの父、ナツィアンのグレゴリウスを暗示する。聖グレゴリウスはアリウス派との不和の長い年月の後、教会に妥

協をもたらした人物である。アリュス派の信奉者は、三位一体説に異議を唱えていたが、彼らの考えは325年のニケーアの公会議において採択され、父なる神、神の子キリストのひとつが確認された。グレゴリウスは、妥協と統一の象徴である。(Burdett, 37) 介護という女性の仕事を体験し、グレゴリーは「偉大な愛と奉仕」を完結した。異装倒錯にいたったグレゴリーのなかに、やがて登場する「新しい女」と並んで期待される「新しい男」の片鱗を示しているのだろうか。

## 6. 帝都ロンドンと The Men and Women's Club

1881年、シュライナーはロンドンへ渡った。1881年の英国は、ジェントリー階級が没落し、資本家の台頭が顕著になり、失業者の大量放出、不景気などで揺れていた。労働者階級の女性が公正な労働環境と賃金を求め、中産階級の女性が教育や職業につく権利、参政権を要求した。1882年には、既婚女性財産法が通過、1886年には母親による子供養育権を認める監督権法が通過した。1884年フランスでは、女性の離婚許可法が通過した。「新しい女」が社会の混乱や悪政のしるしと考えられ、多くの男性に恐れられていた。ケンブリッジ大学は女性のクラブ入会を禁止、オックスフォード大学も女性の入学に反対した。グラッドストーン首相は女性参政権の修正案に反対し、1905年まで女性参政権問題は先送りされた。

英国内の惨事は植民地の社会不安と重なった。アイルランド農民の反乱、カリビアン諸島の騒擾、1857年インド叛乱の余震、1885年ハルツームでのイスラム原理主義者に対するゴードン将軍の不名誉な敗退、1886年、南アフリカの金鉱発見。同年、欧州各国の首脳はベルリン会議で、アフリカの領土を分割した。そこにアフリカの首長は誰一人出席していない。

『アフリカ農場物語』は、Ralph Ironというペンネームで出版された直後、有名になった。グラッドストーン、ジョージ・ムーア、オスカー・ワイルドが彼女に会いたがった。社会主義者で、エリノア・マルクスの愛人エドワード・アヴェリング (Edward Aveling) が『プロGRESS』(The Progress) の書評で評価し、ライダー・ハガードやヒュー・ウォルポール (Hugh Walpole) も激賞した。

シュライナーは、まもなく1885年、カール・ピアソン (Carl Pearson) の創設した男性女性クラブ (The Men and Women's Club) に招かれた。ピアソンは有名な優生学者で帝国の熱狂的な推進者であった。科学的な野心と結婚相手探しの意図から彼は、社会主義者と知的なフェミニストを集めた。クラブの目的は、売春やポルノ、結婚や一夫一婦制、とりわけ「女性問題」、時代の性問題を、感情や色欲を交えず議論することであった。クラブの女性は大抵中流階級の博愛主義者で社会改良家、独身で上品であった。男たちは気軽なツイードを着こなすオックスブリッジの連中で、貴族のクラブ仲間と過激なボヘミアン・ロンドン前衛派の間をたやすく往来するのであった。おおむねクラブはエリート集まりであって、葉巻の香りやポートワイン、香水が、革命的な論題やゴシップの間を漂った。そんな中で、シュライナーのジェスチャーを交えた大声の演説は、周囲を当惑させた。「粗野で野蛮な輩」や「独身女や男嫌い」の中で暮らしたからだと言われた。

クラブの主な議論は、ダーウィニズムであった。フェミニズムは必要と考えられたが、クラブの中では軽視されていた。女性の適切な職務は「種」に奉仕することであって、女性の権利は二の次であった。ピアソンの態度に憤慨した彼女は、男性の性は自然の賜物であるという「明らかだとされた真実」は不正確で、男性だけが許される利益や無意識の欲望を隠蔽するものだと述べた。シャーロット・ウィルソン (Charlotte Wilson) も同様に、「女性の性欲は男性より劣る」というピアソンの仮説に強

く反対した。ウィルソンによれば、「女性の貞操は、男性社会に強いられた〈激しい戦い〉の結果であって、厳しい犠牲を払ってのみ得られた」のだ。シュライナーはピアソンに情熱を感じたが、結局報いられることなくクラブを離れた。しかしこのクラブは、彼女が女性の性や労働問題を考えるきっかけとなった。

## 7. ボーア戦争と『女性と経済』(Woman and Labour, 1911)―女性パラサイト論争

第三作『男から男へ』(From Man to Man, 1927)の主要なテーマは、ヴィクトリア朝植民地社会における性の二重基準に対する怒りである。主人公レベッカの夫はケープタウン在住の男だが、アフリカ人の女中、白人の女優、女学生、有閑婦人を相手に続々と恋愛事件をおこす。一方、彼女の妹ベイビー・バーディは、家庭教師に誘惑されたが捨てられる。しかも後にそれを許婚に話したため、スキャンダルとなり結婚の出来ない娘となる。彼女は家族からもみはなされ、裕福なユダヤ人の愛人としてロンドンで生活するが、やがて売春に身を落とすというプロットである。シュライナーのヴィクトリア朝の婚姻制度への批判は、根本的には経済的理由からであった。「婚姻制度の問題は、男女の精神的肉体的な合一ではなく、単に女性が性や財産や労働の権利を男性の手にゆだねる契約的な譲渡だからである。」バーディの贅沢なロンドンのマンション暮らしも、孤独なレベッカのケープタウンでの生活も、種類の異なる売春だというわけである。また、イギリス社会や植民地の人種、ジェンダーの一般的通念も攻撃的となっている。

その後、アフリカでシュライナーは政治評論家として活躍し、セシル・ローズのアフリカ政策を批判し、『政治状況』(The Political Situation, 1895)を出版している。エドワード・カーペンターに宛てた手紙の中で、彼女は「この国でどんな悪いことが起きているか知らないでしょう。英国人はアフリカの黒人を死ぬほど働かせているのですが、彼等にとって富だけが人生の唯一可能な目的で目標なのです」(McClintock, 289)と書いた。

1899年、彼女は『ある英国人の南アフリカ戦争観』(An English South African's View of the War)を出版、ケープの女性抗議運動で演説をした。シュライナーは、英国と南アフリカの大衆を喚起させるために、あらゆる努力を惜しまなかった。戦争中、英国軍がボーア人の農場を焼いたことや、ボーア人の女性や子供の強制収容所について抗議した。とはいえ、彼女はボーア戦争をボーア文化とイギリス文化の衝突と解釈していて、アフリカ人の視点は完全に抜けていた。

ボーア戦争中、シュライナーは『女性と労働』を執筆した。それはジェンダー化した「女性問題」がテーマで、地球規模の社会歴史を展望するものであった。彼女は、世界的な視野で女性の状況を年代的に、先史時代から産業主義の時代まで扱っている。実は、第二の特徴は本書の大半が残っていないことである。シュライナーが1899年ヨハネスブルグを離れた2ヵ月後、ボーア戦争が勃発し、イギリス兵が彼女の家に押し入り、原稿を燃やしてしまった。数ヵ月後、シュライナーは『女性と労働』を、記憶を辿りながら再執筆し、1911年出版され「女性運動の聖書」となった。

『女性と経済』の最も有名な分析は、中産階級の女性の寄生虫的存在の分析である。彼女は、「近代文明は女性から伝統的な仕事をほとんど奪ってしまった。社会は男性には怠惰になることを許さないが、女性には〈性的寄生虫〉となることを奨励した。…」と書いた一方、「だが、女性は常に働いてきたし、常に給料のためにだけ働いてこなかった」という彼女の言葉は、フェミニスト運動の強力なスローガンとなった。しかしシュライナーの歴史感覚に問題がないわけではない。狩猟と農業のジ

エンダー化した分析や、歴史的転換期の制度的な理論を展開していないところに欠陥はあるが、彼女の功績は、中産階級の働く女性や女性労働者を軽蔑し、有産階級の女性を家庭の天使と崇めたヴィクトリア朝社会の女性観を批判したことである。

シュライナーはこの時期、特にアフリカの政治的展望についてすばらしい先見性を示したが、その政治論は、当然彼女の攻撃した民族中心主義、人種差別主義のために他分野の貢献に比べて無視されてきた。労働問題は即ち「人種問題 (native question)」であるという彼女の人種分析は、階級意識に基づいたものであり、アフリカの領土問題をヨーロッパの労働問題の延長にあると見ていた。

しばしばシュライナーの見解は、時代の先端を行っていた。1891年当時、彼女は1910年には南アフリカの各州が連合し、その後「自由で、自治権を持ち、独立し共和国になる」ことを予見していた。彼女はアフリカ人の居留地、スラムへの封じ込めや、南アフリカの人種の住み分けに反対し、人種別の労働階級の問題を認識していた。また、ソ連とアメリカの二極化を予測し、また白人のサウスアフリカ文化が持つ反ユダヤ主義に反対し、ユダヤ人の世界的貢献を擁護した。さらに、人種やジェンダーの平等というテーマを、国際的な参政権運動に含めようと努力した。

南アフリカに戻ったシュライナーは、やがて8歳年下のサムエル・クロンライト (Samuel C. Cronwright) という農場主と1892年に結婚する。後に彼は、植民地議会の議員に選ばれるが、二人はボーア戦争で農民の国ボーア側を擁護した。1895年、シュライナーは待望の女兒を出産するが、その子は16時間後に死亡した。だが弟ウィリアムは、ケープ植民地の首相になり、シュライナーの政治活動の場は広がった。

英国の女性参政権連盟は、シュライナーを南アフリカにおける女性参政権運動の天才だと賞賛した。彼女はコンスタンス・リットン (Constance Lytton) やエメリン・ローレンス (Emmeline Lawrence) などの過激派を通じて、英国の女性参政権運動家と親しい関係にあったからであるが、参政権問題はジェンダーだけでなく、階級と人種の問題であると認識したひとりであった。しかし女性参政権連盟が非人種差別的参政権要求を拒否した1913年、彼女は連盟を辞めた。その年は、南アフリカの黒人にとって、国土の最も破壊され荒廃した地味の乏しい13%の土地を与えられるという、悪名高い土地法の通過した年であった。また、アフリカ国民会議が創設された年であった。シュライナーは同年、ドイツに渡った。1920年にケープタウンに戻り、そこで亡くなった。

シュライナーは、その作品や政治活動において、植民地主義の孕む矛盾や19世紀後半の女性の問題を、まさに歴史的な転換にまで推し進めた人間のひとりであった。もちろん、彼女自身が認識していたであろうが、社会の変革は、多くの人々に関わる問題であって、単に一人の理想家が新時代の幕を切って落とすことはできない。それでも彼女は一生を通じて、情熱的に勇敢にひるむことなく、新しい時代を拓くために闘ってきた。シュライナー自身、南アフリカのカラー台地から吹く赤い風であった。

## 註

- 1 natural selection は、諸学会での学術用語として自然選択と自然淘汰のいずれでも良いということになっている。八杉龍一訳『種の起源』岩波文庫 解題 pp. 433-446
- 2 Carolyn Burdett は、ダーウィンの『種の起源』出版後、10年以内に書かれた Lewes の評論を引いて、これが如何に大きな社会的事件であったかを説明した。George Henry Lewes 1868 *Fortnightly Review*

article 'Mr Darwin's Hypotheses' in Carolyn Burdett, *Olive Schreiner and the Progress of Feminism* (New York: Palgrave, 2001) p. 1

- 3 最近では、ダーウィニズムの理論の中に、19世紀後半の白人中産階級の倫理観を反映させた彼の思考が組み込まれているという研究がある。Gillian Beer, *Darwin's Plots* (Cambridge: Cambridge UP, 1983)
- 4 「今日、……夫は家族のなかでブルジョアであり、妻はプロレタリアートを代表する。……民主的共和政は、両階級の対立を止揚するものではなくて、反対に、それがたたかわされる地盤をはじめて提供するのである。そして同様に、近代的家族における夫の妻にたいする支配の独特な性格や、夫婦の真の社会的平等を樹立する必要性ならびに方法も、夫婦が法律上で完全に同権となったときにはじめて、白日のもとに現われるであろう。そのときには、女性の解放は、全女性が公的産業に復帰することを第一の前提条件とし、これはまた、社会の経済的単位としての個別家族の属性を除去することを必要とする、…」エンゲルス『家族・私有財産・国家の起源』（岩波文庫 2006）pp. 97-98
- 5 『フロイト著作集3』池田紘一/高橋義孝訳（人文書院 1977）pp. 431-496
- 6 Julia Kristeva, *The Kristeva Reader* (New York: Columbia UP, 1986) pp. 193-4
- 7 'The Personal is Political' 女性解放運動で最も根本的で重要な考えを凝縮していることば。60年代後半に米国で広がり、1970年「2年目の報告」に入れられたキャロル・ハニッシュの論文の題に初めて登場した。この論文は意識変革グループが重要であることを認め、基本的には性（セックス）には政治が介入しているという見解を示している。リサ・タトル『フェミニズム事典』渡辺和子監訳 p. 289より要約
- 8 1836年、ボーア人が英植民地からトランスヴァールへ移動。イギリスが奴隷解放を支持したことで、その人種平等の思想を嫌ってオランダ系農民ボーア人が大移動を開始した。
- 9 Carolyn Burdett p. 10
- 10 キリスト教の答えぬ神をシュライナーは「気まぐれで冷酷な意志」と描いている。Thomas Hardyは、ナポレオン戦争をパノラマ的に扱った長詩『覇者』（*The Dynasts* 1904-1906）で、同じように人間の意思と無関係な 'Immanent Will' をテーマにした。
- 11 Olive Schreiner: *The Story of an African Farm* (Penguin Books, 1995) p. 49 本稿ではこれをテキストとして使用し、引用文は筆者が和訳した。
- 12 Matthew Arnold, 'The Modern Element in Literature'
- 13 Gerald Monsman, *Olive Schreiner's Fiction—Landscape and Power* (New Jersey: Rutgers UP, 1991)
- 14 Thomas Carlyle, 'Signs of the Times' *Selected Writings* ed. Alan Shelston (Harmondsworth: Penguin, 1971) pp. 59-86
- 15 "My Other Self": *The Letters of Olive Schreiner and Havelock Ellis; 1884-1920*, ed. by Y. C. Draznin (New York: Peter Lang, 1992) p. 39. 28 March, 1884.
- 16 *ibid.* p. 439. 19 Jan., 1888.
- 17 Showalter, Elaine, *The Literature of Their Own: British Women Novelists from Brontë to Lessing* (London: Verago, 1978) p. 199
- 18 Burdett p. 31. Stephen Gray, *Southern African Literature: an Introduction* (London: Collings, 1979)
- 19 作品『男から男へ』は、シュライナーの死後、夫クロンライトにより出版された。

テキスト

Schreiner, Olive, *The Story of an African Farm* (London: Penguin Books, 1995)

....., *From Man to Man* (Chicago: Cassandra Edi. Academy Press, 1977)

....., *Dreams* (California: Select Books 1971) (Originally published in 1890)

....., "My Other Self": *The Letters of Olive Schreiner and Havelock Ellis; 1884-1920*, Ed.

Y. C. Draznin (New York: Peter Lang, 1992)

シュライナー, オリーヴ『アフリカ農場物語』(上) 大井真理子・都築忠七訳 岩波文庫 2006

#### 参考文献

Beer, Gillian, *Darwin's Plots—Evolutionary Narrative in Darwin, George Eliot and Nineteenth-Century Fiction* (Cambridge: Cambridge UP 1983, 2000)

Burdett, Carolyn, *Olive Schreiner and the Progress of Feminism* (New York: Palgrave, 2001)

Darwin, Charles, *The Origin of Species—Complete and Fully Illustrated with a New Foreword by Patricia Horan* (New York: Gramery Books, 1979)

Kristeva, Julia, *The Kristeva Reader*, ed. by Toril Moi (New York: Columbia UP, 1986)

McClintock, Anne, *Imperial Leather* (New York: Routledge, 1995)

Monsman, Gerald, *Olive Schreiner's Fiction—Landscape and Power* (New Jersey: Rutgers UP, 1991)

Showalter, Elaine, *Sexual Anarchy* (London: Virago, 1991)

Spencer, Herbert, *First Principles* (London: Routledge, 1867)

Thompson, Leonard, *A History of South Africa* (New Haven: Yale UP, 2000)

バークマン, ジョイス『知られざるオリーヴ・シュライナー』丸山美知代訳 晶文社 1992

ダーウィン, チャールズ『種の起源』八杉龍一訳 岩波書店 1990

エンゲルス, フリードリッヒ『家族・私有財産・国家の起源』戸原四郎訳 岩波文庫 1965

フロイト, ジークムント『文明と其の不満』『フロイト著作集3』池田紘一・高橋義孝訳 人文書院 1977

武田美保子『〈新しい女〉の系譜—ジェンダーの言説と表象』彩流社 2003

タトル, リサ新版『フェミニズム事典』渡辺和子監訳 明石書店 1991

スペンダー, D. 編『フェミニスト群像』原恵理子 遠藤晶子他訳 勁草書房 1987

(うえの かずこ 文化創造学科)